

カンボジアの教会。

ローマ、2011年5月29日 (ZENIT.org)

カンボジアのポルポトの共産主義体制は二百万人の命を奪っただけでなく、国民から文化と歴史を根こそぎにした。そのため、若者たちは過去との絆のないまま家族を作らねばならない。これがカンボジアのカトリック教会の優先課題の一つが教育にある所以であると昨年10月からプノンペンの司教の座にあるオリビエ・シュミッタウスレール師は言う。



(注。クメールはカンボジアのこと。クメール・ルージュ〔赤いクメール〕はポルポトの指導下に1975年から4年間カンボジアを支配し大虐殺を敢行した共産主義グループ)

司教様はつい最近プノンペンの司教に任命されましたが、任命を知ったときの反応はどうでしたか。そのときは39歳で、おそらく世界で最も若い司教ではなかったかと思います。その若さゆえ驚きと一種の恐れを感じました。エレミアのように「主よ、私は若いのです。何もできません」と叫びたい気持ちでした。しかし、「私は主のはしめです」と言われた聖母を思い出し、受諾しました。

司教様は13年前からカンボジアにお住みになっておられますが、それは自分で選ばれたからですか、それともパリミッション会から打診を受けたからですか。

はい、私はパリミッション会の会員で、叙階を受けたときに任務先を与えられました。司祭になって、総長様が「オリビエ神父はカンボジアに行きます」と言われたのです。

心配はなかったですか。

私は驚きましたが、同時に喜びを感じました。その前に3年間日本で神学生として暮らし、アジアが大好きだったからです。それで喜んでカンボジアに行きました。

その後10年以上も農村地帯で司牧をされました。カンボジアの人々から学ばれたことは何ですか。

私にとってはこれ以上ない経験でした。いた場所がすばらしかったからです。それはとても小さい教会でした。着任したとき、たった一人の信者しかいませんでした。私たちはゼロから始めました。教会を建て、若者のグループを作り、2003年に最初の洗礼がありました。今では98人の信者と、来年洗礼を受ける35人の志願者がいます。このほかに、小さな学校(一つの小学校と中学校)を立ち上げました。また、絹の織物工場もあります。クメール人はとても親切な人々で、私を歓待してくれました。私の司祭生活にとって、それはすばらしい経験でした。ここを立ち去るのは、つらいことになるでしょう。

カンボジア人は96%が仏教徒です。福音宣教を始められたとき、隣接する村々はどう反応しましたか。彼らの中に突然キリスト教の村が出現したことに対して、受け入れる姿勢を示したのですか。

この村では私たちは運がよかったと言えます。神が私たちとともにいてくださいます。人々は、私たちが幼稚園を持っていることにとても喜び、親たちは、みな仏教となのですが、自分の子供たちを私たちの幼稚園に送っています。また私たちはボーイスカウトのような活動を組織していて、毎日曜日の午前中に300人の子供たちがその中で教会学校に参加しています。

親たちは子供が改宗するのではと危惧を抱いていませんか。

このような活動は6年前からしていますが、参加者の数は増える一方です。親たちが私たちを評価しているしるしだと思っています。最近、40キロ離れたところに新しい小教区を始めましたが、最初は若者たちのトラブルがありました。

どういふことですか。

2年もの間、仏塔からマイクや拡声器を使って、教会に行く若者は結婚も禁じられ、ONGNの援助も受けられないと、カトリックの誹謗中傷をし続けたからです。私たちは、2006年のクリスマスのミサに村の青少年のお祖父さんお祖母さんを全員招待しました。その結果、彼らは非常に満足し、カトリック教会が開放的で誰をも差別することなく受け入れることを理解してくれました。私たちはよい友達になりました。この村では、毎日曜日に仏教徒の共同体から10人から20人の人が何をしているのかを見に教会にやってきます。彼らはミサに参加し説教を聞きます。私たちとの関係はきわめて良好です。

カンボジアの文化は非常に仏教的です。クメール人であることは仏教徒であることとは同じで、彼らにとっては宗教を替えることは自分たちの文化と伝統を捨てることになるというのは正しいですか。

カンボジアではポルポトによる4年の恐怖政治の下で、文化も宗教(仏教もキリスト教も)もすべてが破壊されました。その後、クメールルージュを追い出したベトナム共産党の10年間の支配の下でも宗教は完全に禁じられていました。ここ20年の間、カンボジア人は宗教も含めた自分たちの伝統を再建することに取りかからねばなりませんでした。そのため人々は以前よりもっと開放的になっていると思います。このことは、特にカトリック教会にとってはありがたいことです。

例えば若者が洗礼を受けるとき、私たちは洗礼式に両親と祖父母を招きます。二年前に葬式がありました。仏教徒にとって葬式は非常に重要なのですが、カトリックは死に対してあまり関心を寄せず、死者に対しても敬意を払わないと思われています。その葬式の中で、彼らは私たちの一挙一動に注目していましたが、結局とてもよい印象を受けました。私は、カトリック信者は死者を排斥することなどしないし、死者のために祈り、復活を信じ希望していることをわからせようと努めました。それは私たちがキリストの証人となり、仏教徒たちが私たちの信仰を見る機会でした。

洗礼を受ける仏教徒は、何に惹かれるのですか。

宣教は青少年に始まります。若者はとてもよく働く宣教師と言えます。最初は、友達が教会に行っているのを見て、教会とは何かよくわからなくても、とにかく自分も行ってみよう、と行動に移す。第二段階で、愛徳を発見する。私たちの教会ではどこでも慈善活動があります。これはすべての人に向けられています。カトリックの兄弟だけでなく、偏見なしにすべての人、特に貧しい人たちに向けられています。これを見て、これ、つまり心を開きすべての人を愛すること、に引きつけられるのです。第三段階は、とても重要なのですが、イエスとの出会いです。しかし、これはもちろん時間がかかります。と言うのは、彼らにとっては初めての体験だからです。祈りと聖書の読書を通じて、イエスと出会います。これはゆっくりと進む過程です。私たちは普段から多くの若者を受け入れており、毎日曜日のミサには100人くらいの若者がいますが、60人以上が仏教徒です。この60人のうち2、30人が要理のクラスを続けるでしょう。

クメールルージュの時代に戻ります。あの時期には教会の多くが破壊され、宗教は徹底的に弾圧されました。この問題は今どのように対処されるのですか。

1975年から1979年の期間は、教会財産の破壊と司祭修道者の殺戮の時代でした。二人の司教が殺さ

れました。一人は処刑、もう一人は病死(カンボジアの歴史上最初のクメール人の司教)です。二百万人のクメール人が殺されたのですよ。宣教師が戻って着始めたのは1989年です。最初の復活祭のミサには1500人が参加しました。そのうちの幾人かは新信者でした。それはタイとの国境地帯にあった難民の避難所で活動した熱心な宣教師たちのおかげでした。またポルポト以前からの信者もいました。カンボジアでの新しい教会は1500人で始まったのです。

司教様は共同体だけでなくインフラも再建されていますが、仕事の進み具合はいかがですか。

プノンペンでは教会は一つしかありませんでした。それはポルポト以前には神学校だった建物で、20年前に買ったものです。将来はプノンペンの第一の教会になるでしょう。4年前に建てた教会がもう一つあります。しかし、プノンペンにはカテドラルがありません。首都のカテドラルはポルポト軍が首都を占拠した一週間後に破壊されました。ということで今は建設中です。今はキリスト教徒自身も元気を取り戻しています。昨年、私たちは1989年から2009年までの20年間の福音化を分析してみました。人々の間にカテドラルを持ちたいという希望がありますが、これはよい兆候です。目に見える教会堂があることが大切だと言うことを教えてくれます。

ポルポト以後、人々に心の傷跡が残っていませんか。

心の傷はポルポト以前から始まっています。70年代のロンノル時代に内戦が勃発し、ポルポト後もベトナム共産党の支配が続きました。それは短くない期間です。その間、文化的伝統や価値や歴史の伝達が中断しました。そういったものが世代から世代に伝えられることは大切です。あの時代、人々の主要な関心はいかにして生き延びるか、でした。食べ物と住処を探すことだけで精一杯で、伝統文化や価値観や歴史を伝える余裕などありませんでした。若者にとって新たに家族を作るのは、困難な仕事となりました。と言うのは、先祖と伝統とのつながりも知識も失ってしまったからです。カンボジアでは人口の60%が20歳以下で、彼らは内戦もポルポトの時代も祖国の文化も知りません。これは政府と、また教会にとっても、一つの取り組むべき課題です。

この問題に関して、優先課題は何ですか。

教育です。施設や組織が破壊し尽くされたので、今はすべてを再建しなければなりません。教育はカトリック教会にとっても優先課題です。プノンペン教区の新しい仕事を始める私にとっても、同じです。私たちはまだ第一世代のキリスト信者だからです。信者になってからまだ20年、10、5年くらいしかたっていない人々からなっています。教育は、彼らが自己のキリスト教的根源を深め、教会や家庭で指導的立場を占め、よりよいキリスト教的家庭を築くために欠かせない手段です。現在私たちは二人の神学生を持っています。この数字はかなり多いと言えます。なにせ、今は1万4千人の信者しかいないのですから。召しだしを促進するために、よりよいキリスト教的家庭を作る必要があります。ですから、第一の目標は教育一般です。私たちは保育園から始めました。今では教区の中に35の保育園を持っています。またドンボスコの精神に従った一つの職業訓練学校を持っています。

200万人が虐殺されるというおぞましい時期の後、和解はどのように進んでいますか。

ほとんどの市民は、そのことについて考えていませんし、興味もありません。和解という概念はただ私たちだけが持っているものです。大多数のクメール人にとってこの地で生きることは容易ではなく、みな食べることで精一杯です。未来だけが問題で過去には関心をもっていません。

なら、この問題にはカトリック教会は取り組まないのですか。

私たちはこの歴史の記憶を風化させないよう努めています。昨年、国際裁判所の裁判官の一人と会う機会がありましたが、そのときあの時代を生き抜いたカトリック信者たちを集めることに議論が集中しました。昨年、私たちの中学校で、クメールルージュの時代についての話し合いの機会を持ちました。あの時代の生き残りの人たちを招待して、その経験を語ってもらい、その後死者たちを埋葬した記念の場所に行き、修道者と司祭たちとともに祈りました。私たちは、少しずつでもあの暗い時代の記憶を風化させないようにしたいと思っています。それはあの記憶を保持することが重要で、この国にとって避けてはならない勇気ある行動だと思うからです。

国王はヨハネ・パウロ2世の葬儀ミサに参加されました。教会と政府との関係はどうですか。

現在、両者の関係は特別に良好です。他のすべての共産主義国家と同様、宗教省という官庁があります。私はプノンペン教区の総代理を三年勤めていますが、政府との関係はきわめて良好で、私たちはいつも歓迎されています。

とはいえ、ことは簡単ではありません。個別の家庭を訪問することは禁止されています。もし村々の家庭訪問が制限されているなら、福音宣教の仕事は困難ではありませんか。

そうではありません。私たちはモルモンのような家庭訪問はしません。また、宣教のために拡声器を使うことは禁止されていますが、この措置は理解できます。プロテスタントの中には、大きな看板に聖書の文言を書いたりしますが、これは違法です。私は村々の家族を、まったく自由に訪問できます。政府に対してはカトリックの信仰とは何かを、カトリックの言葉と非キリスト教の用語を使って説明しています。

プロテスタントのセクトが新たに許可を申請するとき、政府が簡単に許可しないのはなぜですか。

カンボジアにはセクトが多すぎて、政府にはその一つ一つを見分けることが難しいくらいです。しかし私たちは教皇、司教、司祭という一つの単純明快な組織を持っているので、政府には喜ばれています。

政府の拒否反応には、いくらかのセクトが見せるアグレッシブな勧誘活動も関係ありますか。

はい、それも理由の一つです。例えば、昨年、私はカンボジア国籍を申請しました。内務省を訪れ面接をし、私はカトリックの司祭だと説明しました。面接官はキリスト教徒に対して不満を持っており、カトリックとその他の宗派の違いを理解していませんでした。「あなたたちは、『イエスと一緒にいるためには仏陀を憎まねば成らぬ』と壁に落書きをした」と言いました。このような行為は、非キリスト教徒を激昂させることとなりますが、このようなケースがたくさんあるのです。プロテスタントが全員、カンボジアの伝統にこのようにアグレッシブで批判的だと言うものではありませんが、ただ時にカトリック信者が私たちはキリスト教徒だと言うのがはばかられる状況を作っているのです。

カンボジアの国と教会にとって、現在必要なものはなにですか。

教育。そして、人々が神と出会うのを助けること。そのために静かに祈るための時間、イエスと神と付き合うための時間を持つようにすることは非常に重要です。これが仏教の国での大きな課題です。